

教材名：6年生「海のいのち」

②評価規準

知識・技能：語句と語句との関係、語句の構成や変化について理解し、語彙を豊かにしている（１）才
思考・判断・表現：①人物像や物語の全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりしている。
（Ｃ・エ） ②文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめている。（Ｃ・オ）
主体的に学習に取り組む態度：登場人物の相互関係や心情を具体的に捉え、文章を読んで理解したこと
に基づいて、自分の考えをまとめようとしている。

①学習課題

つきたい力：文章を読んで理解したことに基づいて考えを
広げる力。

そのために：人物のそれぞれの生き方や思いが太一にどう影響を与えたのか
考える。

言語活動：太一の生き方にもっとも大きく影響を与えたものは何かを読書
座談会で明らかにし、作品論にまとめる。

①教材と出会う（構造と内容の把握 精査・解釈）

【発問①】この話の中心人物はだれなのか
○登場人物を整理しながら、中心人物と対人物をおさえる
○中心人物に対して対人物が３人いることに気づく
【発問②】太一はどんな少年だったのか
・父だけでなく、村、海など周りの環境にも影響を受けながら夢をも
っている
・子どものころからはっきりとした夢をもっているのは負けず嫌い
でたくましい性格
・「ぼくは漁師になる」と言い切っている。太一は幼いころから漁師
になると決めている
【発問③】なぜ太一は与吉じいさの弟子になったのか
○与吉じいさが登場する場面では直接的な表現が少なく、児童は難
しそうにしている様子も見られたが、個人で考えをまとめたあと、班
や全体で交流をすることで考えがさらに深まっている様子があった
・海を大切に思う気持ちは父も与吉じいさも一緒だから、だれよりも
海を大切にする与吉じいさの弟子になりたいと思った
・太一が父のようにになりたいといった意味は、もぐり漁師になりたい
という意味でなく、父のように海のことを大事にするところにあこ
がれていたと思う

②考えを深める（考えの形成 共有）

【発問①】なぜ太一は瀬の主にもりを打とうとしたのか
○太一は与吉じいさの教えどおり、一本づりの漁師として生計を立てながらももぐり続けたのは、後の文
にでてくる「追い求めているうちに、不意に夢は実現するものだ」の夢を叶えるためであると考えた。夢
とはおとうを破った瀬の主をうつ、かたきをうつ、父を超えるものであると考え、この二つに共通するこ
とはどちらとも瀬の主をうつことだと子どもたちが考えまとめていた
【発問②】太一を思いとどませたものはなにか
○もりは「うたなかったのか」「うてなかったのか」を考え、何かが思いとどませたことに気づく
・太一はこの大魚を「海のいのち」と思うことでうたなかった。その時に思い浮かんだのは「与吉じいさ」
の考えではないか
・太一がうたなかったのは瞬間ではなく、ある程度の時間があつた。そのときに父の言葉、与吉じいさの
教え、母の悲しみなどが一気に気持ちの中に現れたのではないか

③言語活動（創作文） ○成果と●課題

○太一の生き方にもっとも大きく影響を与えたものは何か（ひと・もの・こと）を自分なりの考えを叙述
に即しながら「作品論」（自分が思ったことを、なぜそう感じたのか、叙述をもとに根拠を示して書く）
として書きまとめた。この単元の学習の中に子どもたちが何度も思考し、判断する場面を設定した
ことで「自分がこの作品から受け取ったメッセージや考え」を書くことができていた。

子どもたちのふりかえりより

・私は太一のように生きることは難しいと感じた。まず住んでいる環境が違う。太一は父だけでなく、多くの
漁師の死もみてきているはず。その中で自分の生き方を考え、同じように漁師を選んだことはすごい。
・父の死から「海のいのち」を考え続けた太一は、父、与吉じいさ、母の立場のちがう人たちから自分なりの生き方を選んだんだと思う。



単元計画
はこちら